

ルイス・キャロルの *Feeding the Mind* について

笠井 勝子

はじめに

正確には、*Feeding the Mind* by Charles Lutwidge Dodgson という方がよいだろう。この小冊子は書かれてちょうど百年目の1984年に、セルイン・グッドエイカーの手で出版された。*Feeding the Mind* は、身体が食物を必要とするように、頭にも食事が必要だという話である。ひとことで言えばそれきりのことであるが、身体と食物の関係を、頭について当てはめた語りは、説教じみているものの、そこにあるキャロルらしい着想と類推の遊びを紹介しよう。この原稿が書かれることになった経緯は、グッドエイカーによって、後に記しておく。元のMSは、ハーバード大学のハーコート・エイマリー・コレクションの中に入っている。

1. 螺子は誰が巻くのか

呼吸器や循環器の機能の面倒を人が自分でみる事になっていたら、あるいは、自分の心臓の螺子を巻くように人が創られていたら、いったいどうなるだろうか。螺子を巻くのを忘れた時計が、時を告げるのをやめるように、何の自覚も起きないままに、3時間も止まったまま放って置かれた心臓のことを思い出したときには、友人と外出するのも思うに任せない状態になっていただろう。自然は見事に人を創り、そのおかげで生きるための源となる食事は、体が信号を送って、忘れずに摂るようにできている。空腹感である。呼吸器も循環器も、われわれの頼りにならない螺子巻き作業を待たずに、作動を続けてくれる。ところが頭の方は、

救いの信号を発することもせず、じっと捨て置かれたまま耐え続ける。これが続けば飢餓状態になるだろう。しかしこの場合の生命は、動物の生命ではあっても、とても人間らしい生命とは言えない。

体の調子が悪ければ医者に行って診てもらおう。それでは、頭脳を医者を持っていき、診察して脈を診てもらおうとどうなるだろう。

2. 病院で

医者：どうかされましたか、この頭脳は？最近どうしておられましたか？

何を食べさせたのですか？色つやがよくないし、脈が弱いですな。

患者：じつは、先生、最近あまりきちんと食べていないので、昨日は砂糖菓子をいっぱい食べさせました。

医者：砂糖菓子？どんな？

患者：なぞなぞ、奇問が詰まったやつです、先生。

医者：そんなことだと思ったよ。よく気をつけないと、そういう甘やかかしをして遊ばせていると、今に歯が全部がたがたになり、そのうちに知能消化不良を起こして、寝込むことになる。これから当分は、ごくあっさりした読み物以外はいけませんよ。小説は一切だめ。お大事に。

3. 応用

体をこわして、食事制限や投薬の苦い経験をした人は、自然と体によい食物は何か、肥満になって体に負担を掛けないためには食事の量はどれくらいが適量か、一度に摂る食事のバランスや種類をどうすべきかを考え、また食事と食事の間に間隔をとって消化器官を休ませることや、しっかりと咀嚼して消化吸収を助けて必要な栄養を体に摂取することに

気をつける。少なくとも、気をつけなければならないことがわかってくる。それでは、こうした体のために必要な注意を、頭に置き換えてみると、

- 1) 体のための健全な食物 : 頭脳のための健全な読書
- 2) 肥満体にならないための食物の量 : 頭でっかちにならないための読書量
- 3) 食物の種類とそのバランス : 読書の種類とバランス
- 4) 消化のための食事間隔 : 消化のための読書間隔
- 5) 体による咀嚼と消化吸収 : 頭脳による咀嚼と消化吸収

となる。

キャロルは、1) ~ 5) のそれぞれについて、簡単な説明を加えているが、その中から、彼らしい着想を紹介しよう。

A. 肥満頭脳 (a fat mind) について

体が必要とする量を超えて食事を摂れば、肥満を起こす。脂肪膨れの肥満体があるように、肥満頭脳もあるのではないか。肥満になると、早いペースで歩いたり駆け出したりすれば息切れを起こし、ハードルは飛び越えられずに転げ落ちることになる。それと同じように、話の速度に付いていけず、論理の垣根をきれいに飛び越えられないで、袋小路に入り込みうろろと行き詰まる人は、頭脳の肥満によるものだ。

そういう頭脳に自分は一度や二度は会ったことがある、とキャロルは書いているが、それがオクスフォードという大学の環境の中に暮らしていたことによるものか、あるいは彼特有の控えめな言い方のせいかな。かの猫ならにやにや笑うところだろう。

B. 中休みについて

立て続けに食べてばかりいるのが良くないように、食事と食事の間には4、5時間の間を開けて、消化器官に休みを取らせるのがよい。同じことは頭脳にも当てはまる。両者の違いは、頭脳に必要な中休みの場合は、ほんの4、5分間まったく他のことをすることで、すっかりフレッシュして新たに切り掛かることができる、という点にある。

C. 咀嚼と消化吸収について

食物は消化不良を起こさないためには丸呑みをせず、よく咀嚼し消化吸収することで体に必要な栄養を摂取できる。未消化のままの食物の上に、さらに食事を詰め込んでみても、体によいとは言えない。頭脳についても同じである。優れた書物を幾ら読んでも、咀嚼しなければ、何も理解し吸収しないことになる。

しかしこの咀嚼については、それが厄介な仕事だから頭はなかなか喜んでやろうとしない。それどころか、the mind often “angrily refuses”。そんなことは「むかつくから」やりたくないのである。この「厄介な仕事」とは、具体的に何を指すか。キャロルは、読書で得た知識、情報を整理し、分類し、ラベルを貼っていくことだ、と言う。これは言い換えれば、書かれたものを書かれた順序でそのまま素直に受け入れただけでは、未消化のまま残り、やがて不要として外に排泄され忘れられるだけである。消化液を分泌するように、自分の中にすでにある知識や情報を出し、一緒に捏ね合わせ自分の情報として取り込めるように整理、分類、配列し直してラベル貼りをする。こうしてはじめて、消化活動は完了するのである。

以上は、キャロルの *Feeding the Mind* を、整理分類、札付けしたものである。この内容はキャロルにとっては、お説教めいたものである。ただ、それもそのはずという、書かれた経緯を次にみておこう。

4. *Feeding the Mind* の背景

1884年4月9日、キャロルはダービシャー北部のオールフリタンに牧師のウィリアム・ヘンリ・ドゥレイパーを訪ねた。ドゥレイパーの妻のイーディスは、結婚前の姓をデンマンといい、父は高等法院の判事ジョージ・デンマン、祖父は最高法院司法長官トマス・デンマンで、キャロルは20年前に遡る1864年7月8日、イーディスと妹グレイスの写真を撮るために、ロンドンのランベスにあったデンマン家を訪れて、翌年4月18日の再度の訪問の際に、イーディスにオルゴールを持って行っている。

こどもらしい喜びを与えることを生きがいとも考え、物語をして聞かせ、芝居に連れて行き、手紙やパズル・ゲームをこどもたちに送り与えたキャロルは、こどもたちが成長して大人になると、それきり途絶えて交流を続けることはきわめて稀だった。アリス・リデルをはじめ数え切れない多くのこどもたちが、時とともにキャロルとは疎遠でよそよそしい間柄になっていったのであるが、その中でも結婚後も変わらぬ友情が続いた数少ない一人が、デンマン家の長女で、のちウィリアム・ドゥレイパーと結婚したイーディスである。

1872年10月16日にジョージ・デンマンに宛てたキャロルの手紙によれば、デンマンはイーディスとグレイスを連れてクライスト・チャーチのキャロルをその留守中に訪ねており、その際に自分が訳したグレイのエレジーのギリシャ語訳を置いていった。

1878年5月12日のキャロルの日記には、ミドゥルセックス志願兵のための日曜礼拝にセント・ジェームズズホールへ行ったこと、偶然、デン

マン判事に会ったこと、判事はキャロルを自宅へ招き旧交を温めたことを記している。これは最初の訪問から14年後のことで、9才と6才だったイーディスとグレイスは、それぞれ23才と20才に成長して、しかも *as nice as when I met them as children fourteen years ago* と書いているから、姉妹が気取りのない、キャロルにとって気兼ねのないこどものままの心を持ち続けたことを窺わせる。

イーディスは絵、特に人物画を好んで描き、キャロルに自分の作品を見せて絵が共通の話題になった。1881年には、イーディスが描こうとしていた百合科の植物、ばいもを川から摘んできて鉛の箱に入れ萎れないようにして届け、イーディスからは村のこどもを描いた油絵がキャロルに届けられた。

イーディスがウィリアム・ヘンリ・ドウレイパーに出会ったのは、この頃のことであった。1855年生まれのウィリアムは、75年にオクスフォードのキーブル・コレッジに入学、82年に MA を取った若くハンサムな牧師であった。ふたりは結婚を望むが、イーディスの両親から身分違いを理由に強い反対に遇う。そこで当分の間は会うことを断念したふたりに、運命は味方した。プレストンの駐車場で偶然出会ったことを機に、決意を新たに、両親を説得してふたりは結婚にこぎつける。結婚式は1883年6月19日だった。この5ヵ月前の1月16日に、イーディスはオクスフォードのクライスト・チャーチのキャロルの元をウィリアムと連れ立って訪れている。日記には（とグッドエイカーは以下のような引用をしているが、グリーンの編纂で唯一公刊されている日記にはこの日付の項目はない。キャロルはこの頃新年をギルフォードで過ごして、ブライトンの知人を訪ね、1月11日にブライトンからクライスト・チャーチへ戻っている）、*Dear Edith Denman came at 3 with her fiance, Mr. Daper, and stayed till 5,...I walked to the station with them.*

シュルーベリの聖マリア教会の牧師になったドウレイパーが半年と経

たない同年終りには、北ダービシャーの町オールフリタンへ栄転を果たしたのは、その陰にイーデイスの父親の影響力が働いたと推測される。

キャロルがオールフリタンを訪れたのは、ふたりの結婚の翌年1884年9月22日であった。彼は到着の夜からインフルエンザを発病し、12日間ほどの思わぬ長逗留をしてしまうが、回復は早かった。そしてドゥレイパーの求めに応じて、土地の人々の小さな集まりの席で話をするようになる。彼としては極めて異例のことだった。その際に準備したのが、*Feeding the Mind* である。彼の希望で、集まった人々には、チャールズ・ドジソンとのみ紹介され、キャロルの名は明かされていない。

彼が、手書きした原稿をドゥレイパーに与えて牧師館を後にしたのは10月4日であった。この時、身籠もっていたイーデイス・ドゥレイパーは12月15日男の子を出産したが、2週間後の12月30日には帰らぬ人となった。

以上がキャロルの講話、*Feeding the Mind* が書かれた背景のあらましである。手書きの原稿は、イーデイスの死後、彼女の思い出がまつわるせいか、ドゥレイパーは長い間手付かずの状態のままにしておいた。キャロルが亡くなってから11年後の1909年に、ドゥレイパーは、原稿の売却を書籍商ウォルター・スペンサーに申し出る。スペンサーから、ボストンのN. J. バーレットに買い取られた原稿は、収集家ハーコート・エイマリーの手に入る。ハーコートのコレクションは彼の死後、夫人によってハーバード大学図書館に寄贈され、現在はそこに収蔵されている。

参考文献

Feeding the Mind, A Centenary Celebration of Lewis Carroll's Visit to Alfreton in 1884, Selwyn H. Goodacre, Parker & Son Ltd. 1984.

The Life of Lewis Carroll, Langford Reed, W. & G. Foyle, Ltd., 1932
Diaries of Lewis Garroll Vol. II, ed. by Roger Lancelyn Green, 1954.
The Letters of Lewis Carroll Vol. I, II, ed. by Morton N. Cohen,
Macmillan, 1979.